

演題名	熱川温泉病院における幸福に満ちた入院生活の実現パート2		
施設名	熱川温泉病院	(ふりがな) 発表者(職種)	ふじい ひろふみ 藤井 浩文 (ケアワーカー)
(ふりがな) チーム名	シン・熱川 ^{あたがわ えがおひ だ たい} で笑顔引き出し隊		
分類	③患者サービス・患者満足度の向上をめざすもの		
取り組種別	課題達成型		
改善しようとした 問題課題	診療報酬の都合上、療養病棟の患者に満足度のいく運動量や活動量を提供できていないこと		
改善の指標と その目標値	(指 標) 療養病棟患者の幸福感を (目標値) 向上させる(余暇活動の時間が増える・笑顔が増える・活動する意欲が増える)		
実施した対策	集団体操の実施 ・集団体操の広報(ポスター掲示) ・集団体操のプログラムの工夫(「わっはっは体操」などの笑いのプログラム) ・患者の集団体操への参加促し ・病棟スタッフが、笑顔を引き出した患者を選定して参加してもらう(前回以降の追加対策)		
改善指標の 対策実施 前後の変化	(実施前) ・療養病棟患者の余暇活動はほとんどなかった ・表情変化がほとんどない患者、離床拒否のある患者がいる (実施後) ・療養病棟患者の余暇活動が増えた ・表情変化が出るようになった、離床拒否が軽減した		
歯止めと 標準化	【標準化】 集団体操を継続するために、7月以降も各病棟で週1回開催する 多くの患者さんの「その人らしさ」を引き出すために、病棟スタッフが参加してほしい患者を毎月選定する 【教育】 今後も継続できるように、病棟スタッフや新人リハスタッフに指導する 【管理】 月に1回、リハ師長会議で参加人数や進捗について報告する		
活動の種類 ※複数選択可	③テーマに合わせて形成したチーム活動 ④組織全体で取り組んだ活動	チーム メンバー (職種)	1 田所 康之 医師
活動の場 ※複数選択可	①診療部門 ②支援部門 ③管理部門 ④その他		2 佐野 良一 事務
活動期間	2023年9月 ~ 2024年6月		3 上原 直行 事務
リーダー名 (職種)	横山 雅之 (理学療法士)		4 石川 桂子 看護師
活動回数	10 回		5 小山内 隆 理学療法士
			6 渡部 美穂 看護師
		7 四家 紀子 看護師	
		8 宇野 恵理 看護師	
		9 小林 利恵 看護師	
		10 渡邊 あい 管理栄養士	
		11 横山 雅之 理学療法士	
		12 上嶋 望海 理学療法士	
		13 藤井 浩文 ケアワーカー	

【現状把握】

当院は、回復期リハ病棟と療養病棟を併せ持った病院である。近年、療養病棟患者に対するリハビリテーション量は、診療報酬の都合上、以前より減少していた。病棟内での余暇活動や活動の場は少ない現状があった。そのため、前回のTQM活動では満足のいく運動量や活動量を提供できていない事を当院の課題として設定した。しかし、リハビリテーションの提供自体は制度上増やせない現状もあり、今回も、同様の課題を達成するために同じテーマで活動を継続した。

【目標設定】

療養病棟患者さんの幸福感を2024年5月までに向上させる。

- ・余暇活動時間が増える
- ・笑顔が増える
- ・離床意欲が増える

【攻め所の明確化】

(現在の姿)

診療報酬上、療養病棟の患者に満足のいくリハビリテーションを提供できていない
また、病棟生活においても余暇活動の提供が不十分な状態

(ありたい姿)

リハビリ以外の時間で自主的に自由に参加できる活動があり、充実した入院生活を送ることができる

(ギャップ)

入院生活における余暇時間の活用が不十分

(攻め所)

集団体操の導入、継続

【対策の立案と実施】

集団体操の実施/各病棟週1回 20-30分

- ・集団体操の広報(ポスター掲示)
- ・集団体操のプログラムの工夫(「わっはっは体操」などの笑いのプログラム)
- ・患者の集団体操への参加促し
- ・病棟スタッフが、笑顔を引き出したい患者を選定して参加してもらう(前回以降の追加対策)

【効果の確認】

(有形効果)

症例A: 長期で集団体操に参加することで、自発性向上や笑顔(表情変化)がみられるようになった

症例B: 自発的に運動するようになったり、スタッフに意志を伝えようとするようになった

症例C: 離床拒否が続いていたが、集団体操をきっかけに離床に対して前向きになった

症例D: 介護拒否・離床拒否などがあったが、拒否が軽減。また、自発的に歩行するようになった

(無形効果)

・患者とスタッフのふれあいの時間が増えて、患者もスタッフも笑顔が増えた

・長期療養患者でも関わり方を工夫することで、その人らしさや生きる力を伸ばすことができる事をスタッフが体験、再発見できた

【標準化と管理の定着】

【標準化】

集団体操を継続するために、7月以降も各病棟で週1回開催する

多くの患者さんの「その人らしさ」を引き出すために、病棟スタッフが参加してほしい患者を毎月選定する

【教育】

今後も継続できるように、病棟スタッフや新人リハスタッフに体操の指導をする

【管理】

月に1回、リハ師長会議で参加人数や進捗について報告する

【反省と今後の進め方】

・体操の実施者が同じスタッフになることが多く負担が集中したため、いろんなスタッフが実施できるように指導していく

・参加者をさらに増やすために、実施時間を食事時間に合わせる等のバリエーションを増やす